

平成26年度 学校評価 自己評価書

あま市立秋竹小学校

1 総 括

(1) 教育目標 (学校経営案より)

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

〈めざす児童像〉

- | | |
|-------|-----------------------|
| ○ 強く | 自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子 |
| ○ 正しく | 自ら学び、正しく判断できる子 |
| ○ 明るく | 礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子 |

(2) 本年度の重点努力目標

- ア 学ぶ力を高めるため、基礎・基本の確実な定着をめざし、「わかる授業」「楽しい授業」を心がける。さらに、体験的な学習、問題解決的な学習を重視し、個に応じた指導を大切にする。また、その過程を通してコミュニケーション能力を高める指導を工夫する。
- イ 異年齢集団「なかま」活動により、思いやりの心や感謝の心を育てる。また、「読書の時間」の充実のために「読み聞かせ」を職員とボランティアで積極的に行う。
- ウ 外遊びを推奨し、体育的行事を計画的に実施するとともに、家庭の協力を得ながら正しい生活リズムづくりをはじめ基本的な生活習慣の育成に努める。
- エ 「あいさつ運動」をはじめ、諸行事を通して教師が児童に寄り添う中で、児童理解を深め、心のつながりを大切にしたい学級・学校づくりに取り組む
- オ 定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、安全な学校環境づくりに努める。対応マニュアルを常に見直し、避難訓練を行う。
- カ 学校評価や個人懇談の実施、ホームページの更新、学校通信の発行、外部講師の招聘・行事へのPTA協力等を通して、学校を地域に開き、家庭・地域との信頼関係づくりに努める。

2 自己評価の実施体制

- | | | | |
|----------|----------------|---------|---------|
| (1) 調査時期 | 平成26年12月1日～15日 | | |
| (2) 調査項目 | 別紙アンケート参照 | | |
| (3) 調査対象 | 有効回答者数／対象者数 | | |
| ・児童 | 149名／全149名 | ・学校評議員等 | 9名／全9名 |
| ・保護者 | 136名／全149名 | ・教職員 | 11名／11名 |
| | | | 計305名 |

3 調査結果

別紙アンケート結果参照

4 考 察【児童・保護者・教職員・地域等の総括的考察】

- (1) 全体を通して、数値としては大きな変動はないものの、児童・保護者・教職員ともに、達成状況 A (肯定的な回答の割合が80%以上のもの) の項目数が、わずかではあるが昨年度よりも減少している。それぞれがより高い目標を掲げており、満足できる結果が得られなかったことに起因すると考えられる。
- (2) 児童・保護者に共通して達成状況が A から B へ下がった項目は、重点目標の一つでもある「学校であったことを家でよく話す」である。児童アンケートの結果を見ると、高学年はもとより、低学年においても否定的な回答が多い。これまでも課題となっている項目なので、来年度に向けて、重点的な取り組みが求められる。
児童アンケートの結果で、達成状況がよくなっているのは、読書への取組である。「本を読むことが好きである」と答える児童が年々増加してきており、保護者ボランティアによる読み聞かせや担任以外の教師による読み聞かせを継続してきた成果ととらえることができる。
- (3) 保護者・教職員に共通して達成状況が A から B へ下がった項目は、「基礎的な学力が身につけている」である。全教職員が「授業を工夫し、個に応じた学習を行っている」と回答しているにもかかわらず、保護者はもちろんのこと、教職員自身もまた児童の学力に不安を感じているという現状がある。これに対して、児童はその90%以上が「授業はわかりやすい」と答えていることから、学力向上の妨げとなっている要因を究明し、課題解決を図らなければならない。

- (4) 教職員による評価では、11項目中8項目が達成状況 A である。しかし、唯一、「自分からあいさつをよくする」は達成状況が D となっており、昨年度よりも大きく後退している。重点目標のひとつでありながら、評価が低いことを鑑み、学校としての取り組みや徹底の方法を見直すとともに、児童自身が考えて行動する姿勢を身につけさせなければならない。
- (5) 保護者からは、学校の取組を評価する内容の意見とともに、改善を求める意見も寄せられている。今年度の取組の結果、残された課題に対してより具体的に改善策を講じていかなければならないと考える。

5 成果と課題

<成果>

- (1) 「学校は楽しい」「友達となかよく生活している」と答える児童や保護者は9割を大きく上回っており、本校の伝統的な「なかま活動」により、どの学年の児童も達成感や充実感を味わうことで、生き生きとした学校生活を送っていることが伺われる。また、児童の心に寄り添った温かい学級経営を進めてきた結果、児童一人一人が自己有用感を感じながら日々の活動に取り組んでいることが保護者の学校に対する信頼につながっているとらえることができる。
- (2) 「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」と答える保護者は、8割を超えている。また、「子ども個々が大切にされ、認められている」との評価をも得ることができた。学校だよりや HP 等、情報発信をきめ細かくし、広報活動の充実を図ることにより、学校での児童の様子や学校の取組について理解を得ることができた成果であり、その結果、さまざまな場面で学校に対する協力を得ることができた。

<課題>

評価結果を検討し、学校としての取組も含め、次年度への課題を以下のようにまとめた。

- (1) 「進んであいさつをする」「友だちとなかよくする」など、学校の重点目標を意識した、心の教育をいっそう充実する。
- (2) 周囲の人と温かい人間関係を築くために、「心を拓いて話をする」（自分の思いを相手に伝える）ことができるよう、コミュニケーション能力を向上させる。
- (3) 落ち着いて学習に臨む姿勢が育ちつつある今だからこそ、教師自身が授業力アップを図り、学習内容の定着と基礎学力の向上をめざす。
- (4) これまでと同様に、学校だよりやホームページによりきめ細かな情報発信をするとともに、家庭・地域からの情報収集にも努め、家庭・地域との連携をさらに強化する。

6 改善策

(1) 心の教育の充実

学校・家庭・地域など生活のあらゆる場面で、自分から進んであいさつするよう習慣化を図る。そのためには、児童会のあいさつ運動など、期間限定での重点的な取組を進める。また、あらゆる機会を捉えて、家庭や地域住民にも児童への声かけを呼びかけていく。

(2) コミュニケーション能力の向上

学校生活のさまざまな場面で「話す」「聞く」「話し合う」活動の場の設定を工夫し、「自分の思いを的確に伝え、相手の思いを共感的に受け止める」という伝え合う力の向上をめざして継続的に取り組んでいく。また、教師自身が言語環境の一つであるとのとらえから、言葉の遣い方に留意する。

(3) 基礎学力の向上

児童一人一人の実態を十分に把握し、より効果的に支援することができるよう、TTによる指導や教育支援員の配置を実態に即して行い、個への支援を進める。ICT 機器の活用などにより、どの子もわかる授業・できる授業をめざすとともに、児童の確かな学力の定着に向けて、教員の授業力向上のための研修の機会を設ける。年間を通して計画的に研修を進めることで、より充実したものとする。

(4) 家庭・地域との連携の強化

これまで同様、学校だよりやホームページ等を通して、学校の教育活動についての情報発信を進めると同時に、授業参観で道徳の授業を公開し、学校としての重点的な取組を家庭や地域に発信する。また、学校行事の機会に保護者アンケートを実施して学校に対する要望や意見を把握する。さらに、学校評議員、民生児童委員からも、地域のご意見をいただき日々の教育活動に反映させていく。また、担任から家庭への連絡を密にするとともに、懇談の機会を増やし、保護者との会話を大切にしていく。